

平成20年度
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

一 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えてください。

- (1) エイコウの金メダルを手にした。
- (2) シガイ地をぬけると山が見える。
- (3) ここから見えるヤケイが美しい。
- (4) 売れ行きコウチヨウの商品。
- (5) カイサツ口で待ち合わせる。
- (6) ここに大きな青果市場があった。
- (7) 博愛の精神を大切にする。
- (8) これから入学式を挙行します。
- (9) 今月は残業が多い。
- (10) 今日、会社に辞表を出した。

二 次の□に共通して入る語を漢字一字で答えてください。

(例) □より団子……………(見た目よりも実質を重んじること。)

言わぬが□……………(はっきり言わないほうが値打ちがあること。)

正解……………「花」

(1) 寝耳に□……………(思いがけないことを聞いて驚くさま。)

血は□よりも濃い……………(血縁けっせんの者のつながりは他人よりも強い。)

(2) □も歩けば棒にあたる……………(動きまわると災わざわいにあう(幸運にあう)。)

尾をふる□は打てぬ……………(おとなしくすなおな者をいじめることはできない。)

(3) ちりもつもれば□となる……………(小さなものも集まれば大きなものになる。)

かれ木も□のにぎわい……………(つまらないものでもないよりはりました。)

(4) 泣く□と地頭には勝てぬ……………(まともな道理が通らないさま。)

寝た□を起こす……………(何も知らない者にいらぬ知恵をつけること。)

(5) □の上のたんごぶ……………(自分より上でじゃまになるもの。)

鬼の□にも涙……………(あわれみの心のない者にも一面の情けがある。)

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えてください。

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

このものときから、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と教えられ、忘れたと言っては叱しかられてきた。そのせいもあって、忘れることに恐怖心きょうふしんをいだき続けている。悪いときめてしまう。

学校が忘れるな、よく覚えろ、と命じるのは、それなりの理由がある。教室は知識を与える。知識をふやすのを目標にする。せっかく与えたものを片端かたはしから、捨ててしまつては困る。よく覚えておけ。覚えているかどうか、ときどき試験をして調べる。覚えていなければ減点して警告けいこくする。点はいい方がいいにきまつているから、みんな知らず知らずのうちに、忘れるのをこわがるようになる。

教育程度が高くなればなるほど、そして、頭がいいと言われれば、言われるほど、知識をたくさんもっている。a、忘れないでいるものが多い。頭の優秀さは、記憶力きおくりきの優秀さとしばしば同じ意味をもっている。それで、生き字引というような人間ができる。

ここで、われわれの頭を、どう考えるかが、問題である。

これまでの教育では、人間の頭脳を、倉庫のようなものだと見てきた。知識をどんどん蓄積ちくせきする。倉庫は大きければ大きいほどよろしい。中にたくさんのもものが詰つまってあればいるほど結構だとなる。

せっかく蓄積しようとしている一方から、どんどんものがなくなつて行ったりしてはことだから、忘れるな、が合言葉になる。ときどき在庫検査をして、なくなっていないかどうかをチェックする。それがテストである。

倉庫としての頭にとっては、忘却ぼうきやくは敵である。博識しやくしは学問しやうもんのある証拠しやうこであった。

b、こういう人間頭脳にとっておそるべき敵があらわれた。コンピューターである。これが倉庫としてはすばらしい機能をもっている。いったん入れたものは決して

て失わない。必要なときには、きつと、引き出すことができる。整理も完全である。コンピューターの出現、普及ふきゅうにともなって、人間の頭を倉庫として使うことに、疑問がわいてきた。コンピューター人間をこしらえていたのでは、本もののコンピューターにかなうわけがない。

そこでようやく創造的人間ということが問題になってきた。コンピューターのできないことをしなくては、というのである。

人間の頭はこれからも、一部は倉庫の役をはたし続けなくてはならないだろうが、それだけではいけない。新しいことを考え出す工場ではなくてはならない。倉庫なら、入れたものを紛失ぶんしつしないようにしておけばいいが、ものを作り出すには、そういう保存管の能力だけではしかたがない。

だいいち、工場にやたらなものが入っているのは作業能率が悪い。よけいなものは処分して広々としたスペースをとる必要がある。それかと言って、すべてのものをすててしまっは仕事にならない。整理が大事になる。

倉庫にだって整理は欠かせないが、それはあるものを順序よく並べる整理である。それに対して、工場内の整理は、作業のじやまになるものをとり除く整理である。

この工場の整理に当ることをするのが、忘却である。人間の頭を倉庫として見れば、危険視される忘却だが、工場として能率をよくしようと思えば、どんどん忘れてやらなくてはいけない。

そのことが、いまの人間にはよくわかっていない。それで工場の中を倉庫のようにして喜んでいる人があらわれる。工場としても、倉庫としてもうまく機能しない頭を育ててしまいかねない。コンピューターには、こういう忘却ができないのである。コンピューターには倉庫に専念させ、人間の頭は、知的工場に重点をおくようにするの②が、これからの方向でなくてはならない。

それには、へんけん忘れることに対する偏見を改めなくてはならない。そして、そのつもりになってみると、忘れるのは案外、難しい。

C、何か突発の事件が起ったとする。その渦中かちゆうの人は、あまりのことに、あれもこれもいろいろなことが一時に殺到さつとうする。頭の中へどんどんいろいろなことが入ってきて、混乱状態におちいる。茫然自失ぼうぜんじしつ、どうしていいかわからなくなる。これが「忙しい」のである。「忙」の字は、心（りっしんべん）を亡くしていると書く。忙しいと頭が働かなくなってしまう。頭を忙しくしてはいけない。がらくたのいっぱい③の倉庫は困る。

平常の生活で、頭が忙しくてはいけない。人間は、自然に、頭の中を整理して、忙しくならないようになっていく。

睡眠である。

眠ってからしばらくすると、レム（REM）睡眠というものが始まる。マブタがピクピクする。このレムの間に、頭はその日のうちにあったことを整理している。記憶しておくべきこと、すなわち、倉庫に入れるべきものと、処分してしまつてよいもの、忘れるものとの区分けが行なわれる。自然忘却である。

朝目をさまして、気分爽快そうかいであるのは、夜の中に、頭の中がきれいに整理されて、広々としているからである。何かの事情で、それが妨げさまたげられると、寝ざめが悪く、頭が重い。朝の時間が、思考にとって黄金の時間であるのも、頭の工場の中がよく整頓せいどんされて、動きやすくなっているからにほかならない。

昔の人は、自然に従った生活をしてきたから、神の与え給たまうた忘却作用である睡眠だけで、充分、頭の掃除ができた。ところが、いまの人間は、情報過多といわれる社会に生きている。どうしても不必要なものが、頭にたまりやすい。夜のレム睡眠くらいでは、処理できないものが残る。これをそのままにしておけば、だんだん頭の中が混乱し、常時、「忙しい」状態になる。ノイローゼなども、そういう原因から起る。

かつては、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と言つていられた。倉庫として頭を使った。中が広々していたからである。このごろは入れるものが多くなったのに、スペースには限りがある。その上、倉庫だけではなく工場としてもものを創り出さなく

てはいけない。場ふさがりがごろごろしているのは不都合である。

忘れる努力が求められるようになる。

これまで、多くの人はこんなことは考えたこともないから、さあ、忘れてみよ、と言われても、さっさと忘れられるわけがない。しかし、入るものがあれば、出るものがなくてはならない。入れるだけで、出さなくては、爆発してしまう。

食べものを食べる。消化して吸収すべきものを吸収したら、そののこりは体外へ排泄^{せつ}する。食べるだけで、排泄しなければ、糞^{ふん}つまりである。これまでの、倉庫式教育^④は、うっかりしていると、この糞^{ふん}つまりをつくりかねなかった。どんどん摂取^{せつしゅ}したら、^⑤どんどん排泄しないといけない。忘却はこの不可欠な排泄に当る。目のかたきにするのは大きな誤りである。

勉強し、知識を習得する一方で、不要になったものを、処分し、整理する必要がある。何が大切で、何がそうでないか。これがわからないと、古新聞一枚だって、整理できないが、いちいちそれを考えているひまはない。自然のうちに、直観的に、あとと必要そうなものと、不要らしいものを区分けして、新陳代謝^{しんちんたいしゃ}をしている。

頭をよく働かせるには、この「忘れる」ことが、きわめて大切である。頭を高エネルギーの工場にするためにも、どうしてもたえず忘れて行く必要がある。

忘れるのは価値観にもとづいて忘れる。おもしろいと思っっていることは、些細^{ささい}なことでもめったに忘れない。価値観がしっかりしていないと、大切なものを忘れ、つまらないものを覚えていることになる。これについては、さらに考えなくてはならない。

(外山滋比古『思考の整理学』)

※新陳代謝……新しいものが古いものと、次第に入れかわっていくこと。

問一

 にあてはまる言葉をそれぞれ後のア～エから選び、記号で答えてください。

- | | | | | |
|---|-------|--------|--------|--------|
| a | ア、つまり | イ、ただし | ウ、しかし | エ、それとも |
| b | ア、そして | イ、ところが | ウ、なぜなら | エ、すなわち |
| c | ア、または | イ、そこで | ウ、ところで | エ、たとえば |

問二 —— 線①とありますが、「博識」な人のことを^{ひゆ}比喩的に表現した言葉を、五字以内で本文からぬき出してください。

問三 —— 線②とはどういうことですか。次から最も適当なものを選び、記号で答えてください。

- ア、人間の頭を倉庫のようなものと考え、忘れることは必要なことであると思
い込んでしまうこと。
- イ、人間の頭を工場のようなものと考え、忘れることは必要なことであると思
い込んでしまうこと。
- ウ、人間の頭を倉庫のようなものと考え、忘れることは良くないことであると思
い込んでしまうこと。
- エ、人間の頭を工場のようなものと考え、忘れることは良くないことであると思
い込んでしまうこと。

問四 —— 線③について、この部分と同一の内容を示す一文を、これより後の本文からぬき出し、最初の五字を答えてください。

問五 —— 線④とありますが、「倉庫式教育」とはどのような教育ですか。文中の言葉を用いて説明してください。

問六 —— 線⑤とありますが、忘却を「目のかたきにする」のがなぜ大きな誤りな
のでしょうか。二十字〜三十字で説明してください。

問七 次のア〜オについて、本文の内容からみて適当なものには○を、適当でないも
のには×を解答らんに入してください。

ア、記憶するという点においては人間はコンピューターにはかなわないので、今
後、人間は知識を蓄積しようとする必要はない。

イ、学校では記憶力の優秀さが頭の優秀さであると考えられがちであるため、知
識を増やすことを目標としてしまうことがある。

ウ、人間が何かを忘れてしまうことがあるのは、人間がコンピューターのような
機械ではなく、心をもった生き物だからである。

エ、現代人は忙しさによる睡眠時間の不足が原因で、頭の中が混乱しがちである
ため、うまく忘却作用を働かすことができない。

オ、人間は眠っている間に不必要なものを忘れていくため、朝の時間は頭の中が
整理され動きやすく、思考するにはふさわしい。

四 次の文章を読み、後の問いに答えてください。

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

行方不明の智^{ちとる}さんを探しているさくらと勝田くんは、智^{ちとる}さんが廃^{はいちやく}屋の小学校の屋上にいるかもしれないと思^{おも}いあたる。途中、さくらと絶交状態にある、かつての親友梨^{りり}利を電話で呼びつけた。学校に着き、屋上を目指す二人の前に不審火の炎が立ちふさがった。

あたしはゆらりと頭上をあおいだ。立ちこめる黒煙で屋上はもちろんのこと、天^{てん}井^{じょう}さえももう見えない。こらした瞳^{ひとみ}に激痛が走って、涙がとめどなくあふれだす。智^{ちとる}さんが待っているかもしれない屋上に行きたいのに、這^はってでも行きたいのに体が言うことをきかない。足が自分の足じゃなくなっていくみたいだ。指が自分の指じゃなくなっていくみたいだ。あたしの体があたしのものじゃなくなっていくみたいだ。神さまが返せと言っている。どうせろくな使いかたはしないから返せと言っている。足が熱い。ふくらはぎのあたりが焦^こげつくようだ。火の手が迫^{せま}っている。こうして人は死んでいくのかもしれない。ろくなことはしないまま、会いたい人にも会えないまま、伝えたい気持ちを伝えられないまま、人は簡単に狂^{くる}い、簡単に死んでいくのかもしれない。

熱い床にほおを押しあてたまま、あたしはごぼごぼと力なく咳^{せき}をした。

次第に呼吸も苦しくなって、意識が 1 遠のいていく。

死がさしせまったとき、人は楽しかったときのことを思いだすのだとだれかが言っていた。幸せだったときや、大好きだった人たちの姿が走馬^{そうま}灯^{とう}のように駆^かけめぐるのだ、と。燃えさかる校舎の中であたしが思^{おも}いだしていたのも、やはり楽しいことだった。梨利と過ごした日々。一緒にのぼった歩道橋。さまよった渋谷の街。めずらしいプリクラを探しまわったこと。一時間四〇〇円のカラオケで歌いまくった。新発売のチョコレートをずらりと並べて味くらべをした。どこにでもついてくる勝田くんをおちよくつ

て遊んだ。そんな他愛たわいのない、安っぽい思い出が、つぎつぎに浮かんでは、消えていく。この他愛のなさに、安っぽさに支えられて生きてきたのだ。そう思った瞬間しゅんかん、煙のせいではない本物の涙がにじんできた。

「さくら。さくら」

そう、この少し甘ったるい梨利の声。この声があたしを支えていた。

「さくら、なにしてんの？ ねえ、どうなってんの!？」

ふりむけばすぐそこにある。この瞳にいつも **2** した。

「起きて。立って。行こうよ、ねえ、しっかりして！」

あたしの体をゆする細い腕。とてもやわらかい。まるで本物みたいだ。

「しっかりしなっば！」

いきなり平手打ちをくらって、 **3** した。

「逃げなきゃ死ぬんだよ。早く！」

ぴしゃりと言うなり、梨利はあたしを力まかせに抱きおこした。ぼうっと上半身を
持ちあげたあたしを、強引に、抱かかえるように南階段へと引っぱっていく。この腕力。

この感触かんしよく。これは走馬灯じゃない、 **A** だ、と確信したとたん、なえていた足に
再び力がこもった。

「さくら……」

ふらつきながらも自力で歩きだしたあたしに、梨利が泣きそうな目をむけた。

「だいじょうぶ？」

赤い髪を熱風にはためかせながら、 **4** 顔をゆがませる。

あたしはその小さな体に思いきり抱きついた。

やわらかい。そしてあたたかい。やっぱり本物だ。本物の梨利だ……。

言いたいこと、伝えたいことが山ほどあったはずなのに、声にならずに空咳からせきばかり
がこみあげてくる。まだもうろうとしている頭が言葉をうまく組みたててくれない。

それでもあたしは満足だった。梨利が来てくれた。こうしてまた会えた。それだけで **2**

もう、なにも思い残すことはないほどに、満ちたりていた。

なにも思い残すことはないほどに――。

「さくら、話はあとだよ。なんかもう、なにがなんだかわかんないけど、とにかく早く逃げなきゃ」

梨利のけわしい視線を追ってふりかえると、さっきまで舌の先で北端の教室をいたぶっていた炎は、今では大口を開けてそのとなりの教室までもむさぼろうとしていた。すでに北端の天井は焼けおち、ぱっかり開いた煤まみれの口が大量の黒煙を空へとふきあげている。

屋上にも火がうつってる……。

「やばいよ、マジで」

血の気のひいた梨利のほおにも、ぽろぽろ涙が伝いはじめた。

「行こ、さくら！」

掌てのひらで顔を覆おほうようにしながら、梨利が勢いこんで階段へと駆けだした。あたしはその背中を踊おどり場まで追いかけてから、「待って」とやにわに、呼びとめた。

「梨利、待って」

「なに？」

逸はやる瞳でふりかえる梨利に、「お願い」と苦しく口を切る。

「来てくれてありがとう。でも梨利、先に逃げてて」

「え？」

「あたし、あとから行くから。きっと行くから」

「なんでよ」

「屋上に行くの」

「屋上？」

「友達が待ってるかもしれない」

「……勝田くん？」

「ちがう。ほかの人」

梨利は不審げに考えこみ、やがて首をゆらした。

「待ってないよ。待ってるわけないよだれも。こんな火事の中で」

「うん、でももしかしたらいるかもしれないから」

「勝田くんの言った話のこと？ 釣りの船がどうのって？」

「ううん、[※]月の船じゃなくて……」

智さんは月の船を待っているわけじゃない。かといって勝田くんの言うように、あたしたちを待っているわけでもなさそうな気がする。もうずっと前から智さんは死だけを待ちつづけてきたのではないか。ふいにあの喉^{のど}もとの傷が頭をよぎって、ぎくつとした。

「ごめん、梨利。あたし、急がなきゃ」

「どうしても行くの？」

「行く」

「わかった」と、梨利は言った。「じゃあ、あたしも行く」

「え」

「あたしも一緒に行く」

決然としたまなざしで、梨利が右手をさしのべる。その指がしなやかな動きであたしの右手を捕^とらえた。

「何回も夢に見てうなされた。忘れられなかった。さくらの顔がまともに見れなかった」

「梨利？」

「あの日、さくらがあんなに一生懸命^{けんめい}助けを求めてたのに、あたしはさくらを見すてて逃げたんだ」

「……」

「あたしはさくらがいなきゃだめなのに、さくらがいなきゃ未来だって今だってこまるのに、そんなさくらを、見すてて逃げたんだ」

「梨利……」

「もうあたし、さくらをおいて逃げられない」

あたしの手を握る梨利の指先に、ひときわ強い力がこもった。伝わってくる思い。たしかなぬくもり。たしかな力。

もしも生きて残れたなら、あたしはもう一度、^④なにかを信じていけるかもしれない。ふいにそんな気がして、胸が詰まった。その信じたなにかを大切に、全力で守って、そしてもう二度と、危険ななにかに巻きこんだりはしない、と……。

智さんのことで梨利をまきぞえにはできない。

「梨利、ありがと。でも、ごめん」

そのぬくもりに未練を残しながらも、あたしが思いきって梨利の手をふりほどこうとした、そのとき。

階下からばたばたと足音が響き、汗だくの勝田くんが駆けあがって来た。

「勝田くん！」

「さくら……梨利も来たか。こんなところでなにしてんだよ」

踊り場にたたずむあたしたちを見るなり、勝田くんはあきれ顔で「早くー」と階下へうながそうとする。

「放火魔は？」

あたしがきくと、くやしそうに唇をねじって、

「逃げられた。でも追跡の手がかりはつかんだぜ」

後生大事に握りしめた紺色のキャップ——放火魔のかぶっていたそれをコートポケットにねじこみながら、「ほら早く」ともう一度あたしたちをせきたてる。

あたしは、だけど勝田くんの示す逆の方向に、一歩足をふみだした。

「さくら、ばか、よせっ」

「だって屋上に……」

「オレが行く」

「勝田くんは梨利をお願い」

⑤ 言いながらあたしは勝田くんの胸にむけ、梨利の背中を力まかせに押しやった。

「ちゃんと梨利を捕まえて、外まで、出口までつれてって」

しゃがれ声でさげぶなり、さっと身をひるがえして、猛然と階段をのぼっていく。

梨利はやっぱりひとりじゃあぶなっかしい。だから勝田くんがつれて逃げればいい。

でもあたしはこのままじゃ帰れない。この校舎の上に本当に智さんがいるのかはわからないけど、たとえパーセントでも可能性があるのなら、あたしはそこに行かなきゃいけない。かつてあたしをタツミマートの出口に導いてくれた智さんを、どこにも導くことはできなくても、とりあえず迎えに行くことはできるのだから。それは暗い部屋に蛍光灯を灯すようなことで、

B

屋上へと続く南階段を、あたしは一気に駆けあがった。ときおり煙におせながら、死にももの狂いで重い足を運びつづけた。

(森 絵都『つきのおね』)

※月の船……智さんの心の負担を軽くするために勝田くんが考えた、作り話に出てくる船。

問一 1 3 4 にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えてください。

ア、くしやりと イ、ほっと ウ、ハツと エ、すうつと

問二 —— 線①はどのような様子を表現したものですか。それを説明した部分を二十字程度でぬき出してください。

問三 A に入る漢字二字の語句を本文中からぬき出して答えてください。

問四 —— 線②のさくらの気持ちはどのようなものですか。説明してください。

問五 —— 線③の表現の特徴を述べたものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えてください。

ア、体の一部を用いた慣用表現で、炎にすべてが吸い込まれていく様子を感じ覚的に表現している。

イ、擬人法を用いて、炎の燃え広がる様子を効果的に表現している。

ウ、色の対比を用いて、教室ごとの炎の違いを、より鮮明に表現している。

エ、あたかも実況放送のような口調で、炎の様子をより正確に表現している。

問六 —— 線④の「なにか」とは何だと思えますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えてください。

ア、友情 イ、自分 ウ、神様 エ、未来

問七 —— 線⑤の理由を「くから」につながるように、二十字でぬき出して答えてください。

問八

B

に入る文を次から選び、記号で答えてください。

ア、うす暗がりの中に立つ人を導く道しるべとなるものなのだから――。

イ、いつもチカチカと目ざわりであるが、そのおせっかいも時には役立つものだから――。

ウ、とてもありがたい、光り輝く目標となることができるのだから――。

エ、たいした役に立たなくても、でもきつと必要なことなのだから――。